

スケプティック ハンドブック

水掛け論のような地球温暖化の議論に、もう耳を貸す必要はない。このハンドブックを読んで、くだらない言い合いに巻き込まれない策と手段を身につけよう。



[スケプティック(skeptic): 多数意見や、権力者が言うことは正しいという理屈を受け入れない人]

結論は簡単なことだ。

「簡単には語れない」や、あやふやな答えにだまされるな。気候は複雑なことだが、このハンドブックで焦点を当てる質問はただ1つ。

「二酸化炭素量が大気中が増えることによって、世界で温暖化が起こるのか」

全てはその質問にかかっている。もしも二酸化炭素が地球温暖化の大きな原因でなければ、炭素隔離、キャップアンドトレード、排出権取引、京都議定書は、時間とお金の無駄使いだったことになる。その時間とお金を使って、癌の治療法を発見するとか、ソマリアの子供たちに食料を送るとか、他に大切なことはあったはずだ。的を射た議論をすることこそ、環境を守るということだ。

「CO₂が温度を上昇させているっていう証拠はどこにあるのか」

的を外すな

1. 4つのポイントを押さえる

1つの質問と4つのポイント。そこから横道にそれたら、議論して意味のあることは無い。話が脱線してしまったら、「炭素が悪者」という議論が、証拠の欠落した濡れ衣だと暴くことは出来ない。

2. 質問を忘れるな

信念がなければ、何も証明する必要は無い。スケプティックは金や権力を欲しがっているわけじゃない。信者は、自分の言っていることが正しいと言い張る。正当性を語りたい人には、語らせておけば良い。大切なのは、あやふやな答えで言葉を濁されたら、何度でも質問を繰り返すこと。

地球温暖化の議論のすそ野は広い。全部を解決しようと意気込むのも良いが、的を射るとは、重要なところをピンポイントで狙うことだ。

3. 温室効果と地球温暖化は別物

まず温室効果と地球温暖化の区別をつけること。今までもその住み分けが曖昧で、議論は横道にそれてきた。温暖化が現実であっても、温室効果ガスがその原因だと言うことにはならない。

4. いじめっ子に立ち向かう

証拠を求めることはおかしなことではない。軽視されたり、脅しのような態度に出られたり、理不尽に攻撃されたら、無視をしないこと。何故きちんと説明してくれないのか聞いてみよう。科学的議論では、神聖な論理なんてものは無い。教義は宗教に必要なもので、科学には必要ない。

温暖化が現実であっても、温室効果ガスがその原因だと言うことにはならない。

注釈:「炭素 (carbon)」、「二酸化炭素 (carbon dioxide、CO2)」は、このハンドブック中では同義として使用する。(科学的な実証ではなく、読みやすさを追求するため)

ISBN: 978-0-9581688-2-3

人間活動に伴う地球温暖化 (AGW、Anthropogenic Global Warming)とは、人間活動によって排出される二酸化炭素が地球温暖化 (GW) の主な原因だとする論理。

Version 2.2: 2009年4月

改訂版、追加注釈、良くある質問、コメント、冊子注目のリンクは以下のリンクを参照:

joannenova.com.au

地球温暖化議論と失われた証拠

2003年から事実関係は変わった。そして証拠も無くなった。

以下の4つのポイントを押さえる

1. 温室効果である証拠がない

気象観測気球で上空からの撮影が何度も行われたが、温室効果ガスが原因で起こるとされる「ホットスポット」のパターンは見つかっていない。その兆しすら無い。温室効果ガス以外のものが温暖化を引き起こしている。

2. 氷コアが最大の証拠であったが、新しく詳細なデータが収集され、その論理は打ち砕かれた。炭素が温度上昇の原因とされてきたが、過去50万年にわたり、二酸化炭素レベルより先に、気温が上昇していることが分かった。平均して800年も先駆けて気温が上昇している。最近考えられていた二酸化炭素と温度の因果関係は根底から崩れた。何か別のものが温暖化を引き起こしている。

3. 温度は上昇していない

衛星が地球の周りを1日2度回転し、突き止めたのは、2001年から地球の温度は上がっていないということ。あと何年たてば、この事実が受け入れられるのか。温度は横ばいにも関わらず、CO₂は増大している。何かは変化しているようだが、コンピューターモデルにはその何か反映されていない。

4. 二酸化炭素が影響する温暖化はすでに終わった

例えばCO₂の量を2倍にしても、影響が2倍になるわけではない。最初の二酸化炭素分子の影響力は大きいですが、逐次的な影響というのは段々少なくなる。実際、炭素レベルが10倍高かった過去に氷河期になったということもある。炭素は脇役にしか過ぎない。



更に不都合な事実

二酸化炭素以外の何かは気候に影響を与えている。しかしコンピューターモデルには、その「何か」が分かっていない

1. 温室効果である証拠がない

温室効果が原因ではないというのは、ノックアウト級の驚きかもしれない。もしも温室効果ガスが地球温暖化の原因であれば、熱帯地方の上空10キロの位置で既にその兆しは起こるはずだ。しかし、温度の上昇を示す「ホットスポット」は存在しない。

グラフA(気候変動における政府間パネル(IPCC)より)は、温室効果ガスによる温度変化パターンを示した予測モデルだ。

グラフB(米国気候変動科学プログラムより)は、1979~1999年の実際の温暖化状況を示す。気象観測気球が地球の大気を観測したが、予測していた「ホットスポット」は発見されなかった。

温度計が示すとおり、温暖化は「温室効果ガスによるものではない」

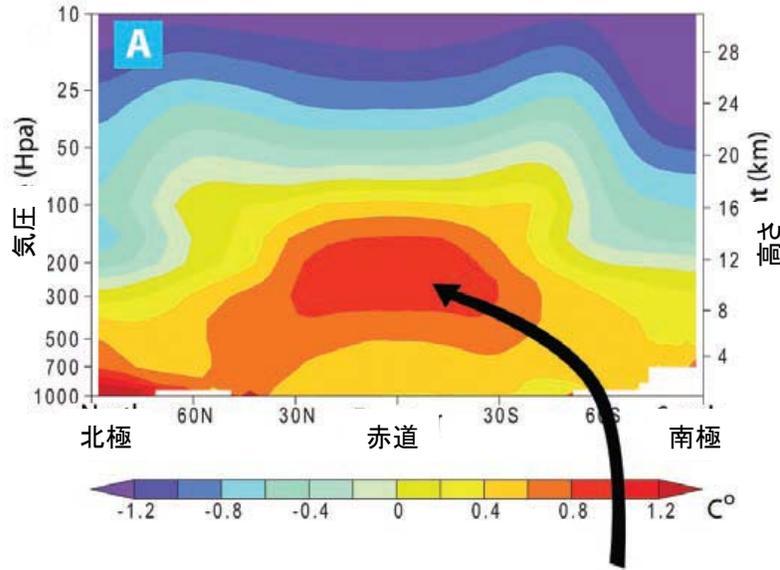
結論: 温室効果ガス以外の「何か」が大部分もしくは全ての温暖化の原因だ。しかし、モデリングで、その「何か」は分かっていない。

AGWの答え: ホットスポットはある。シャーウッドかサンターの記事を読めば分かる。

スケプティックの言い分: サンターはホットスポットを確認したとは言っていない。「データに不明瞭な部分を発見した」と言っただけだ。同じデータを使い、何度も統計学的に再分析を試みたが、サンターの答えは、ホットスポットはそのノイズに隠れているかもしれない、だった。一方シャーウッドは、温度計を無視して、風速計で温度を計測するべきだと言った。果たして信用できるのか、、、

単純な気象観測気球が良い結果を収集することが不可能であれば、コンピューターモデルに期待できることって、、、

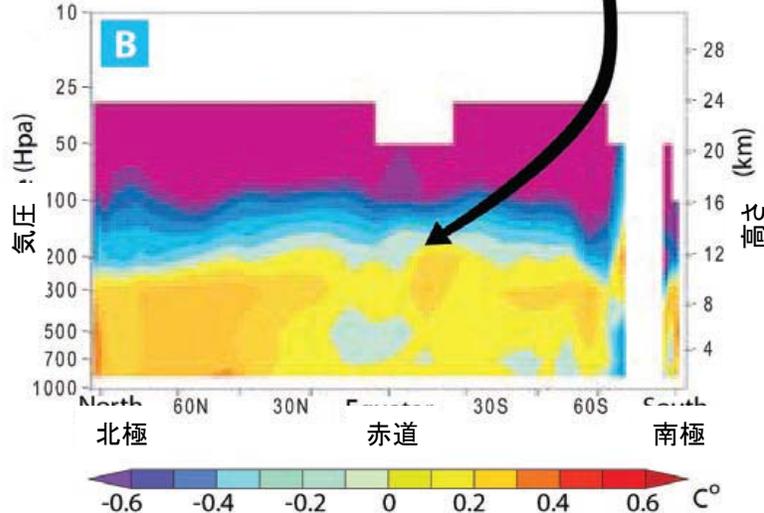
温室効果ガスが原因とした場合の予測



コンピューターモデルが予測した温室効果ガスによる温暖化パターン

温度計による結果: ホットスポットは観測されなかった

実際の大気温度

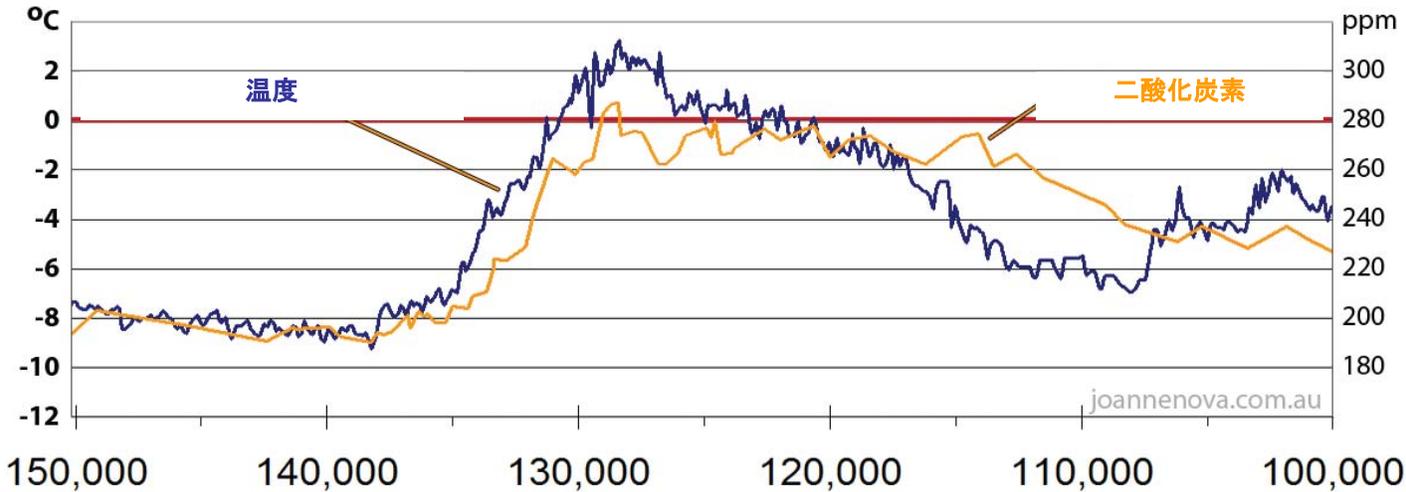


温度計は温度を測るために作られたのに、風速計のほうが都合よく温暖化の測定に役立つのか。

出典: (A) Assessment Report 4, IPCC 2007, Chapter 9, p. 675 (Santer他(2003)を基にした内容); (B) Synthesis and Assessment Report 1.1, 気候変動科学プログラム(CCSP), 2006. Hadley Centre weather balloons 1979-1999, p. 116, fig. 5.7E, from Thorne他、(2005) 以上に関する情報: <http://www.sciencespeak.com/MissingSignature.pdf>

2. 氷コアが示すCO2レベルと温度変化の数百年のズレ

ボストーク 氷コア 150,000～100,000年前



CO2の上下と温度の上下には平均して数百年のズレがある

1985年にグリーンランドで採掘された氷コアが、150,000年遡るCO2レベルと温度の関係を明かした。当時の観察では、温度とCO2は同調しているかに見えた。それが「温室効果」が注目を浴びたきっかけだ。しかし1999年に明らかになったのは、炭素レベルの上昇は、温度上昇の後に起こったことがわかった。2003年には、温度上昇が先行し、CO2上昇がそれを追ったズレは800 ± 200年だと分かった。

AGWの答え: 約800年のズレがあったのは分かるし、CO2が温暖化の発生原因でないにしても、温暖化「促進」の原因だ。

スケプティックの言い分: もしもCO2が温暖化の主要原因だったとしたら、温度は延々と上昇し、「暴走温室効果」状態になっているはずだ。5億年も暴走状態にはなっていないなら、秘密の何かは温暖化の暴走を止めているか、CO2は脇役にすぎないということだ。どちらにしてもCO2の影響度は少なく、モデリングはその大きな「何か」を見逃している。

促進は推測に過ぎない。証拠の無い論理には何の意味もない。

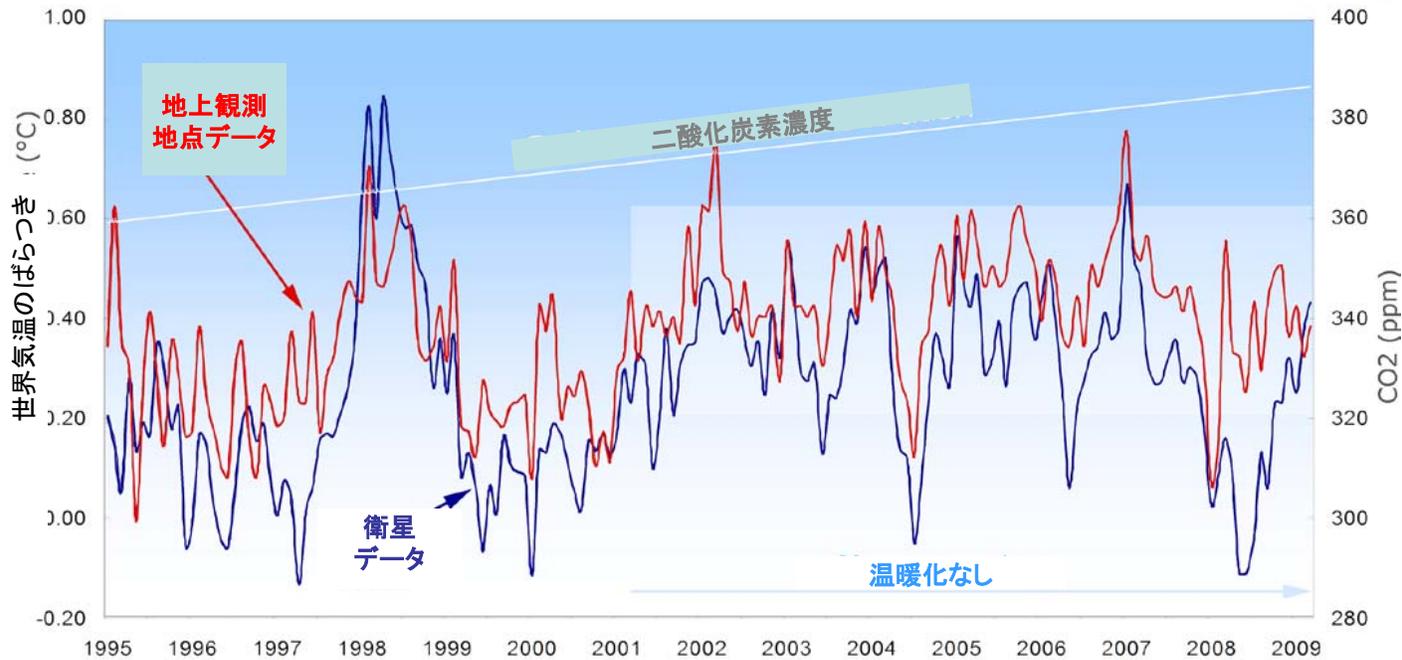
結論:

1. 氷コアは過去の温暖化や冷却化の原因を証明していない。単純に、温度が上がれば、炭素の大気中量は拡大する(海が二酸化炭素を更に放出するからだ)。

2. 温暖化の原因は他にある

アルゴアの映画は2005年に製作された。アルゴアは、氷コアに関して、「複雑な問題だ」といった。時間のズレは、温度と炭素の因果関係が疑わしいことを示す。まともな調査であれば、こんなに大きな要素を無視するわけが無い。

3. 世界の温度はもう上昇していない



2001年から、地球は暖かくなっていない。

AGWの答え 1: 過去10年間のうち6(7か8か)年は、史上最高の暑さを記録した。

スケプティックの言い分: それは事実だが、温暖化の傾向という点ではあまり意味を持たない。2008年、07年、06年と各個の動きではなく、まとまりや、長期傾向で考えるとどうなるのか。1700年代の小氷期以降、温度の上昇は続いている。SUVよりもずっと前の話だ。気象観測は100年ほどの歴史しかなく、それは相対的には短いものだ。

それに、多くのデータは地上観測地点で収集されたもので、信頼性は低い(7ページ参照)。都市ヒートアイランド現象というのは、都市部にある温度計で、都市開発部での気温上昇や、駐車場での暑さを測ったもので、地球温暖化ではない。衛星が地球の周りを24時間回っていて、過去30年に渡り、継続して温度を観測している。もしも暖かくなっているなら、衛星で感知しているはずだ。

AGWの答え 2: この横ばい部分は、データの「ノイズ」や自然変動だ。

スケプティックの言い分: 「ノイズ」と言っても何かしら原因があるはずだ。そして、その「何か」は、明らかに重要なものだ。もしもまた温度上昇が始まったとしても、最近7年間の横ばい傾向から、モデリングが何か見落としていると言える。

7年以上も、モデリングは正しく気候を予想していない。だとしたら、70年分のモデルも正しいといえるのか。

結論:

このデータは、地球温暖化が終息しているという証拠にはならないが、炭素が大きな原因でないことは証明できる。コンピューターモデルが盛り込んでいない何か温度上昇を引き起こしている。

地球温暖化の一番の「原因」は エアコン

米国海洋大気庁の気温観測地点の写真がこれだ。地上に設置されたこれらの温度計が、衛星や気象観測気球に取り付けられたセンサーよりも先に温度上昇を記録した。

敏感に反応する温度計がコンクリートで固められた駐車場に設置してあったり、通りの多い道路や、エアコンの室外機のすぐ近くにあったり、そんなデータを信用できるのだろうか。NASAは信用できると言っている。

オーストラリア・メルボルンのラトロブ通りとビクトリア通りの角に、歴史ある温度観測地点がある。9つの車線と路面電車の真っ只中に設置されている。

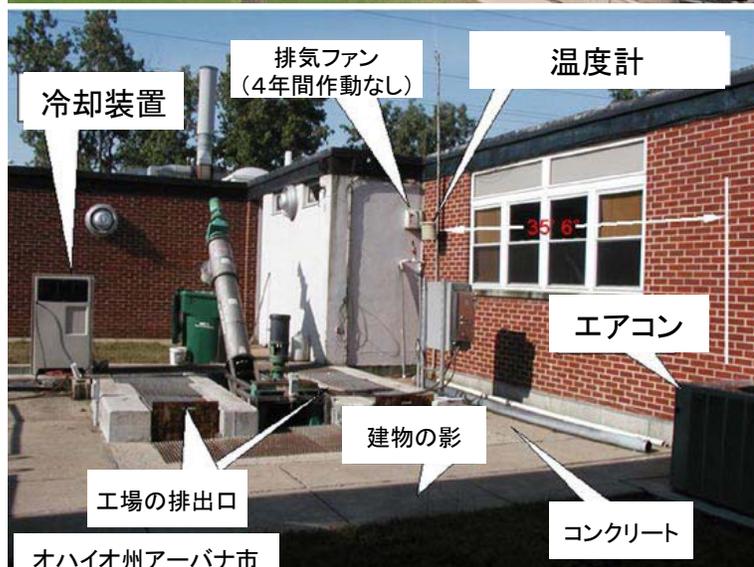
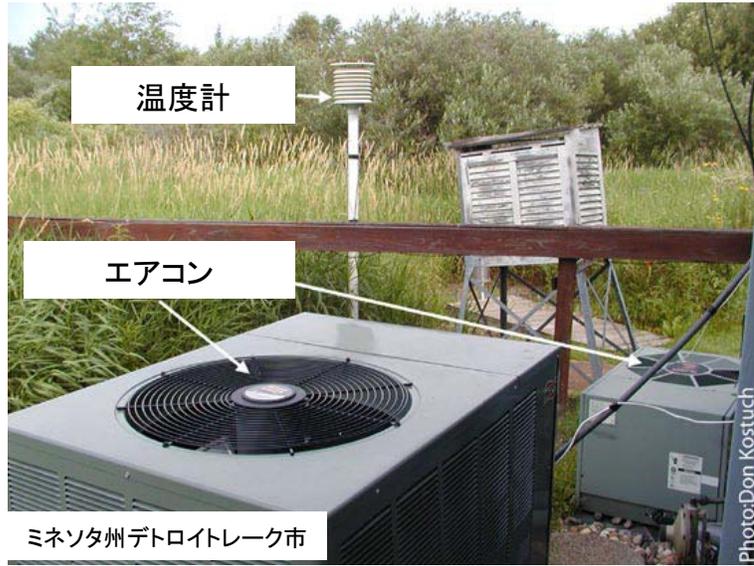
そんな状況下で温度が上がらない訳がない。

AGWの答え：都市ヒートアイランド現象の影響は、モデリング担当者が、修正してから測定している。

スケプティックの言い分：そのモデリングの修正分は、「測定・予測可能なデータバイアス」のみ。各地点の実証的調査を行って、熱源一つ一つの影響を加味したわけではない。

(写真はsurfacestations.orgのブログに寄せられたボランティアからのもの)

エンジン、コンクリート、エアコンに囲まれた
温度計は信用できない。



4. 二酸化炭素が影響する温暖化はすでに終わった

CO₂が2倍になったからといってあまり変化は無いであろうという説明は以下の通りだ。

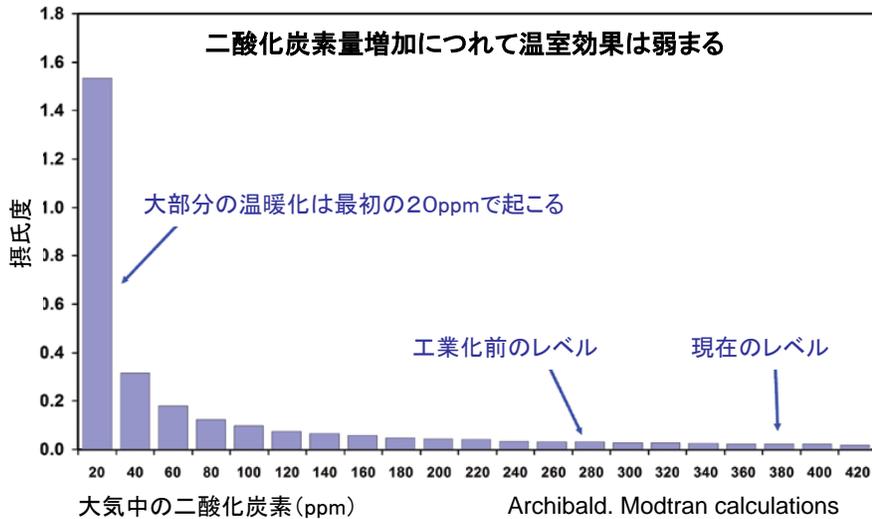
既に大気中にある炭素は光を最大限に光を吸収している。CO₂は好みの光の波長を飽和状態一杯まで吸収する。お気に入り以外にも似たような波長を吸収することは多少あるが、炭素の吸収帯が好む光子はほぼ残っていない。

自然の温室効果は事実だが、その効果で暖かさは保たれている。その時点で、最大効果を達成しているので、それ以上の炭素が投入されたところで、余分な分子が存在するというだけだ。

人間が炭素を更に放出しても、太陽がもっと輝くことは無い

AGWの答え: 対数吸収曲線は既に知られていて、気候モデルに反映されている。

スケプティックの言い分: そのモデルは大ざっぱな予測と多数の推測(想像)から出来ている。「実験室での温暖化」と「惑星単位での温暖化」は同条件とは言いがたい。試験管には海流も無ければ、雲や雨も無い。雲と湿度の影響はとにかく複雑で、例えば、上層雲は温暖の、低層雲は冷却の効果を一般的に持つといわれる。どちらの効果が優先するのか。モデルは、理解も無く、純粋に温暖効果として、雲の効果を反映させている。これは、小さな要因ではない。雲と湿度で、半分以上の炭素「効果」が影響を受けるのだ。冷静には受け取れない。



上記のグラフは大気中のCO₂が20ppmずつ増加するごとの温暖化傾向を示す

AGWの答え: まだ100%の飽和にいたっていない。

スケプティックの言い分: それは事実だが、意味はない。対数曲線が100%に成ることは絶対に無い。(金星の空気はほぼ純粋なCO₂だが、100%の赤外線吸収するわけではない。)全てのCO₂分子は、微小ながら温暖に影響を与え続けるが、この追加の影響は既に起こっている温室効果ほどの威力はない。

その効果はごく微小で、観測不可能だ。

結論:

もしもCO₂が空気中に放出することで影響が出るならば、氷コアや温度計で証拠が採れるはずだ。でもそんな証拠はない。つまり、炭素の影響は些細なものである。

消えていく信者、増えるスケプティックたち

下記の著名人たちは、温暖化は深刻な問題だと信じていた。しかし、新しい証拠の発見とともに、考えを変えた。以下のリストは、著名なスケプティックの一部を挙げた。

注意: 以下は興味深い、脱線と思う読者もいるかもしれない。資格があろうが、環境問題に敏感であろうが、経験が深かろうが、炭素の影響についての証拠にはならない。権威は論理ではないからだ。しかし、温暖化の議論は、「信じるか、信じないか」から、新しい意見を持ったグループを形成するに至った。やはり違うらしい、と考えを変えた者たちだ。スケプティックの数は増えている。

イバル・ジーバー(ノーベル物理学賞受賞者):「私はスケプティックだ。地球温暖化はいまや宗教だ。」

Claude Allegre博士(地球物理学者):100点の科学的記事を著し、20年前に地球温暖化の危機を調査した先駆者の1人。現在気候変動の原因は「不明」と言う。

Bruno Wiske(アルベルタ大学・地球物理学者):京都議定書に敬意を表して「京都ハウス」の建築を試みたが、最近では「The Emperor's New Climate: Debunking the Myth of Global Warming (仮訳: 王様の新しい気候: 地球温暖化の神話を暴く)」と題した著書を発表した。

Nir Shaviv博士(天体物理学者):イスラエルの受賞歴がある若手トップ科学者の1人。「証拠が欠けていることが分かれば、もっと人間活動に伴う地球温暖化のスケプティックになるものが増えるだろう。」

ジョアンナ・シン普森博士(大気科学者):女性初の気象学博士号を取得。「どの機関とも提携せず、資金も受けていないので、やっと正直に意見を言うことができる。」以前NASAで190以上の調査を書いた。

デービッド・エバンズ博士(数学者・技術者):6年間を炭素会計に費やし、豪州温室効果防止局の元で受賞に値するモデルを構築した。豪州の京都議定書の土地・森林利用の遵守状況を測定するFullCAMを構築した。エバンズは2007年にスケプティックになった。

リード・ブライソン博士(数学者):気象学の父というあだ名を持つ者の1人。過去数年間温暖化に関しスケプティックな意見を先導してきたが、2008に他界した。

デービッド・ベラミー博士(植物学者):有名な英国環境活動家。元ダラム大学講師であり自然に関する英国のテレビ番組司会者。「地球温暖化は主に自然現象。世の中は無駄に多額のお金を費やし、直せないものを直そうとしている。」

タッド・マーティ博士(気候調査):フリンダース大学地球科学の教授。「自分で調査を始めるまでは地球温暖化を固く信じていた。」

Chris de Freitas博士(ニュージーランド・オークランド大学気候科学):人間活動に伴う地球温暖化に関してスケプティックの1人に。

伊藤 公紀博士(環境物理化学者):「(温暖化に対する恐怖は)科学における最悪な醜聞だ。事実が明かされたとき、人々は科学と科学者にだまされたと感じるだろう。」

Andrei Kapitsa(ロシアの地理学者、南極氷コア調査員):京都議定書論者の言うことは本末転倒だ。地球温暖化が二酸化炭素量を増大させるのであって、その反対ではない。

James A. Peden(大気科学者):「多数の科学者が、自分の科学者としてのキャリアを守りつつ、地球温暖化の話を蒸し返さず、静かに逃げ出す方法を探している。」

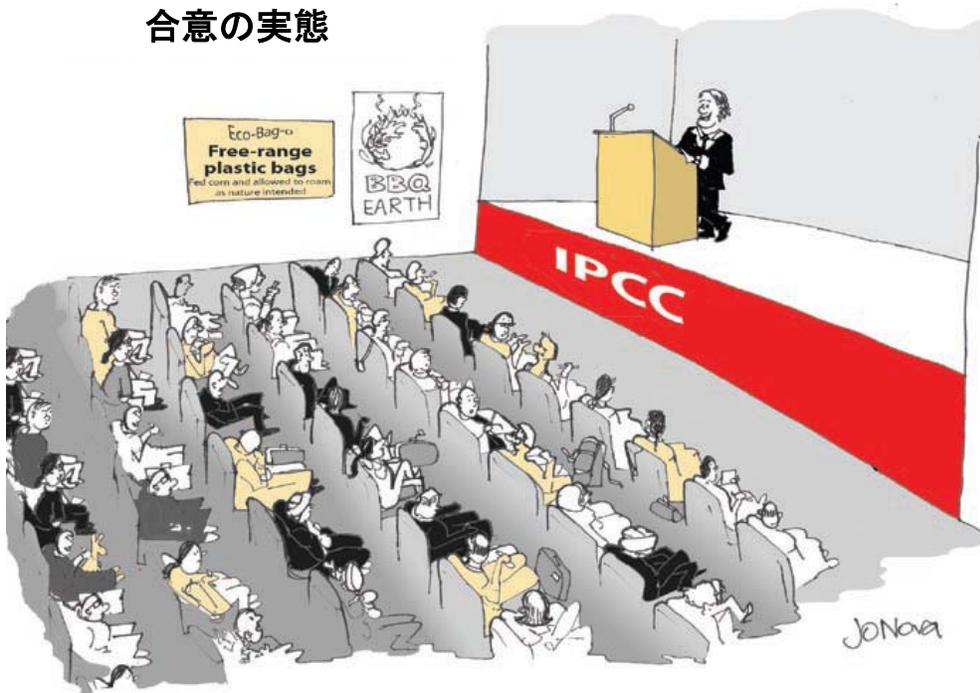
リチャード・コートニー博士(国連IPCC専門評論家、英国機構大気科学コンサルタント):「現在、人間活動に伴う地球温暖化を証明できる証拠は発見されていない。」

合意の意味とは

一体何人の科学者が参加する必要があるんだろうか。3万人以上の科学者が、地球温暖化問題に対する署名プロジェクト(Petition Project)に署名を行った。そのうち9,000人は博士号を持っている(炭素と博士号の数は無関係だが、「合意」神話を揺るがす一手になるだろう)。署名書類の内容は大変明確だ。

「人間が放出する二酸化炭素、メタン、その他の温室効果ガスが、現在もしくは近い将来、地球の大気を破滅的に暖め、地球の気候を破壊するという、根拠ある化学的証拠は1つも無い。むしろ、大気中の二酸化炭素が増えることによって、自然の植物や動物の環境には良い効果を多数生み出すという証拠は明確だ。」(出典:www.petitionproject.org)

合意の実態



「温室効果ガスが、温暖化に全く影響を与えていないと思う方は手を挙げてください。手を上げるって事は、この仕事もう必要ないって事です。どうですか。」

署名プロジェクトは、個人からの寄付と、ボランティアによる運営で行われている。業界や企業からの献金は全く無い。2007年末、再度署名リストの確認を行った。

AGWの言い分: 署名はでたらめで、何度も名前を使いまわしているだけだ。

スケプティックの言い分: でたらめと言うなら、虚偽の署名を10点あげて欲しい。

注意: この内容は、本文から外れていると思う読者もいるかもしれない。科学は多数決ではない。人数や学歴・職歴に特別な意味は無いが、耳を貸さない人たちには意味のある言葉かもしれない。科学は合意によって確定するものではない。

気候は、大人数の科学者が騒いだところで変わらない。おしくらまんじゅうのように、その科学者の周りの温度は上がるかもしれないが。

合意って、一体いつ取られたものなんだろうか。

証拠とは何か

科学は観察に大きく依存する。証拠は、見えるもの、触れるもの、聞こえるもの、記録できるものだ。

以下に証拠があれば、炭素が温暖化を引き起こしていると言えるだろう。

- CO2のレベルに合わせて温度が上昇した。(上昇していない)
- 温室効果と同じ上昇パターンで、大気の温度が上がっている。(上がっていない)

これは証拠ではない。

- ・極の氷が消滅している
- ・氷河が小さくなっている
- ・サンゴ礁が変色している
- ・キリマンジャロ山の雪がなくなっている
- ・マダガスカルのカツネザルが何かしている
- ・4頭のシロクマが、嵐に巻き込まれた
- ・サイクロン・ハリケーン・台風に変化
- ・干ばつ
- ・川の枯渇
- ・コンピューターモデル*
- ・他に良い説明が無い
- ・博士号を持った人がそう言った
- ・2,500人の科学者がなんとなく同意している
- ・政府委員会が長い報告書を作成した
- ・政府が1億ドルを超える排出権取引を行っている
- ・ジェリ・“ジンジャー・スパイス”・ハリウェルが、署名プロジェクトに署名した
- ・神学者になり損ねた、元政治家がドキュメンタリー映画を作った

*何故コンピューターモデルは証拠にならないのか。

洗練された手法で、専門家が行っている検証方法であり、精度はドンドン上がっている。しかし、気候を正確に予測できたとしても(今のところ出来ていないが)、論理がしっかりしていても(今のところ論理は穴だらけだ)、証拠に取って代わることはない。前提条件と予測を論理から割り出し、複雑なシステムでモデルは出来上がっているが、2001-2008年の間、温暖化が停滞するとはじき出したモデルは1つも無かった。CO2よりも大事な何かは抜けているのに、何か分からないまままだ。

熱せられれば地球上の氷は溶けるし、カツネザルは居住地域を変えるし、干ばつも起こる。だが、それは結果であって、何故温暖化が起こったのかを説明していない。

炭素との関連を明確に示す証拠はあるのか。



証拠や状況を明確に出来ない信念は科学ではない。論理は反証可能でなければ、ただの思い込みに過ぎない。

霧をぬけて

ピアレビューで確認された証拠が山のようにある。炭素排出を削減するべきだ。

→ 地球温暖化の証拠は山とある。しかし、それを炭素と結びつけるのは、話が違う。

→ 「CO2が増えたからといって、温度が高くなったという証拠を今日見せられるか。」

一般的な反応（証拠を口にしない）

A: 権威に頼る

IPCCが言うには、、、
IPCCは国際的委員会というだけで、証拠にはならない。
肩書きで話をするのは証拠ではない。資金を受けて、スポンサーの都合の良い結果を探し、長調たる報告書があっても証拠にはならない。

IPCCはピアレビューを行った論文を多数報告している。それを無視できるのか。
論文は証拠ではない。現在のレベルの気温の上昇と観察による証拠の関係を示せるか。(IPCCはそれを示すことが出来ない。)

王道の理解では合意が出来ている。
論理が間違っているといると証明するのは、1人の科学者だけでも可能だ。

科学は多数決ではない。

投票で自然を変えることは出来ない。

-太陽が輝くのは、米国科学アカデミーがそうだったからではない。
-雲はデイビッド・スズキを知っているわけじゃない。
-海は、アル・ゴアの考えなんか気にしていない。

気候は、ただあるがままの姿だ。



B: 横道にそれる

議論は終わった。
議論って何だ。
誰の意見だ。
証拠はあるのか。

今が行動の時だ。
この行動が的外れだとばれる前に、さっさと始めるのか。

公害はとにかくあるのだから、再生可能エネルギーの研究は如何にしる行うべきだ。
行動は的を外して行うべきだ。後ろ盾の無く、「なんとなく役に立っている」なんて、政策ではない。
何かを解決するのに、むやみに課税するのは、無駄ではないのか。

予防として行えばいいんじゃないか。
問題ではないものを、どうやって直すのか。
行動を起こすには、コストがかかっていることを忘れるな。

じゃあ、温暖化は何故起きているんだ。
「炭素が原因ではない」ということと、原因を挙げるのは、それぞれ別の話だ。

頑なに信じる人たちは、炭素輩出にお金がかかっても仕方が無いと言う。



C: 個人攻撃

「気候の専門家でもないのに、何がわかるんだ」
アル・ゴアだって専門家ではない。
何が証拠になり得るか分かっている。(君たちはわかっているのか)
グラフの読み方だって分かる。

皮肉屋で、スケプティックで、石油会社の回し者か。
悪口を言うのが精一杯なのか。
ファシストだろうが、石油王だろうが、衛生が記録した気温のデータには影響を与えない。個人の意見は、氷コアの状態に影響を与えないからだ。
政府は、石油会社よりも多額のお金を使って、気候を研究する科学者を雇っている。
(米政府: 1989-2007に気候研究に費やした金額は300億ドル。エクソンは2300万ドルを費やした。)



細かい事に目を奪われ、行き詰まることはある。一步引いて、流れ全体と科学の基本に立ち戻る事が必要だ。水掛け論にならないように気をつけろ。議論を回避するのではなく、焦点を定めないと、横道にそれるだけで、何日だって取り留めの無い会話で時間を取られてしまう。(それも、ある意味面白いかもしれないが。)

無関係な証拠にしがみつるのは意味が無い。(海の氷が実際は増えていることや、火星で温暖化が起こっている事を知っていたとしてもだ。) 権威ある人の議論や、独立研究者(資金の手当を受けていない)がどうだとか、多くの科学者が賛同しているとか。こんな話では、重要なポイントからずれてしまう。肩書きの応酬や個人攻撃、疑いをかけられても、横道にそれず、相手に、「証拠は何か」と聞く事が大切だ。

理想的な反応 (証拠で話をする)

D: 時代遅れの証拠

氷コア、上昇傾向にある気温以前、その傾向は正しいように見えたが、データの精度が上がリ(前述1-3を参照)

時代遅れもいいところだ。

ピアレビューの論文(正しいはずだ)
全てが正しい訳が無い。

ピアレビューされていないものは、役に立たない
ピアレビューは便利なシステムだが、証拠にはならない。論理は証拠で立証されるものだ。

ピアレビューされていないものは、役に立たない
ピアレビューは便利なシステムだが、証拠にはならない。論理は証拠で立証されるものだ。

E: 無関係な証拠

海面水位の上昇、氷が溶け出し
ている状況、砂漠の拡大、干ばつは歴史的なレベルで発生している。河川の枯渇や、森林の消失、、、
それは、温暖化の結果であって、原因ではない。
結果を延々と述べても、原因は結局分かっていない。

原因と結果をごちゃ混ぜにしているだけだ。

G: コンピューターモデル

20以上の気候モデルが、温暖化は、人間活動に伴う温室効果ガスによるものだと確認した。
全てのモデルは、2001-2008の間に気温が上昇すると予測した。炭素以外の重要な要素を見落としのまま作られている。
現在の気候を予測したといっても、ただの論理に過ぎない。実際の証拠が無いからだ。モデルだけでは証拠にならない。

現在の温暖化は人間活動に伴う温室効果ガス放出からなっている以外に考えられない。
つまり「他に何も考えられない」
そんなバカな話がまかり通っているのか。

F: 論理

CO2が温暖化に影響を及ぼす事は、100年前から分かっている事で、研究室でも証明されている。この温暖化は、二酸化炭素のせいに決まっている。
本当だが、現在の炭素レベルを考えると、その因果関係は大して意味を持たない。CO2は、特定の光のみを吸収し、現在ほぼ飽和状態にある。CO2が増幅したところで、状況にほぼ変化は無い(前述4を参照)
研究所の論理があるのは構わないが、実際の観察の結果は、その結果と適合しない。

実世界の結果は、研究所の結果に勝る。

もっと知りたいという心広い人達へ

「そんなに多くの科学者が間違っていると言う事か」

1:間違っている訳ではなく、原因は何かと言う大きな課題を見ていない。温暖化の影響を研究する事に気を取られ、原因の発見を忘れている。ボルネオのオランウータンの生息地が喪失の危機にあるということと、気候変動の原因は違った問題だ。同じように、風力発電効率、炭素隔離、昆虫媒介の伝染病も、原因ではない。温暖化の影響は見えているが、影響と原因を混在させている。

2:合意があったとしても証拠にはならない。多数の賛同が得られても、その論理が正しくないと証明するには、1人の科学者が足りる。論理は、現実を正しく捉えているか、もしくはそうでないかのどちらかだ。「博士号を持っている人が何人いるか」で、正当さを量る前に、「証拠はどこか」と視点を変えてみよう。昔は、地球が平らだとか、機械は空を飛ばないとか、太陽が地球の周りを回っていると人々は信じていたが、それは覆された。

気候変動について、明確に言えるのはただ1つ。政府が多額に金をつぎ込んだ委員会活動は、とっくに旬を逃した活動だ。

「涼しい期間があるのは、自然に起こるばらつきに過ぎない」

その通り！自然に起こるばらつき、「ノイズ」と呼ぶ人もいるだろう。何かの原因で起こっている。現時点で言える事は、その「何か」は、温室効果ガスより焦点として扱われるべきだと言う事。「ノイズ」はやり過ぎるようなものではなく、惑星の気候を変えるだけの力を持っている。それが何かを解明し、コンピューターモデルに追加すれば、モデルの精度は上がるかもしれない。

経済システムとグローバルタックスを、来年夏の気候を予測する事も出来ないモデルに任せてみようなんて、リーマンブラザーズのMark-to-Modelのモデル評価と同じだ。

「二酸化炭素は汚染物質だ」

二酸化炭素は、植物の栄養素だ。つまり植物を育てている。前世紀に比べて、15%程ばかり、植物の成長を促したCO2に感謝するのはどうだろう。(15%も促進した！)商業用の植物栽培には、温室内に二酸化炭素を追加し、収穫高を上げると言う手法が使われている。毎年2ppmずつ二酸化炭素量を増やすなんていうレベルではなく、「倍にするとか、5倍にする」という勢いだ。つまり、今日生きている人達は、大気中の二酸化炭素量増加のおかげとも言える。科学的に、以下の事は正しいと言える:

二酸化炭素は飢饉から人々を救う。

「予防策としてはどうだろう」

そのアイデアは何の利益も生まない。石炭の値段を引き上げ、アフリカの人たちが石炭を入手することが難しくなれば、木を燃やして、その煙を1日呼吸する事になるだろう。それによって、赤ん坊が肺の病気にかかり、森林が燃料入手の為に壊滅する。同時に、電気トラックは、コストが高く、生鮮食品が値上がりする。崖っぷちにたたされた人が、猿を食用にし始め、絶滅するまで食いあさるだろう。腐った肉を食べ、子供達が死亡したり、クワシオルコルのような栄養失調に悩まされることになる。冷蔵保存のワクチンが不足し、赤痢で死亡するものが出てくる。

一方西洋では、遺伝子治療や、がん研究に役立つはずだったお金が投入されず、過去10年間の医療の発達は遅れ、50万人の命を失う結果となった。医療機関に回すべきだった資金は、無害なガスを地中に埋める為の努力に注がれた。これ以上の間違いは許されない。だから、今こそ証拠を探すべきだ。

コスト効果を考えてみよう。二酸化炭素が悪者だと分かっているのに、その脅威から逃れる為に、あと何人の命を無駄にすれば良いのだろうか。

「化石燃料の代替を探すのは悪い事ではないだろう」

目的を無視して、良い結果を望むのは、偶然の政策だ。確かに、石油は高価で限りがある。国家政策として、間違った推測から課税システムを作るのもありかもしれない。会計士や弁護士をドンドン雇って、経済を食いつぶす直前に、グリーンな代替策を見つけられるかもしれない。(でも、「グリーン」って一体どういうことなのか意味は分からない。二酸化炭素は、植物の栄養素だと言うのに。)否定はしない、「悪い事ではないだろう。」

そんな政府にぴったりのキャンペーンスローガンは、「私に一票を投じてください。因果関係を煙に巻き、問題をひとまとめにし、てんで違った方向に向かって、問題を解決します。」

良い政策には正しい科学が必要だ。そう出なければ思いつきだ。

「二酸化炭素のレベルは、記録的だ」

大気中の二酸化炭素のレベルは、過去65万年間で現在より高い時があった。5億年前まで遡ってみると、炭素のレベルは、10-20%高いなんて言うレベルではなく、10-20倍高かった。地球は既に、暴走温室化効果を味わっていて、何も起こらなかった。現在のレベルよりも二酸化炭素レベルが高かったときに、氷河期にもなった。超凝縮された二酸化炭素がどんな温室効果を持っているが知らないが、他の気候の変動とは比べ物にならない。人間活動から放出された二酸化炭素だろうが、海から放出されようが、違いは無い。分子は結局同じだ。

現在の勢いでCO2が増加すると、史上最高レベルに達するのは、今から3, 300年後だ。

「気温は今までよりも急速に上昇している」

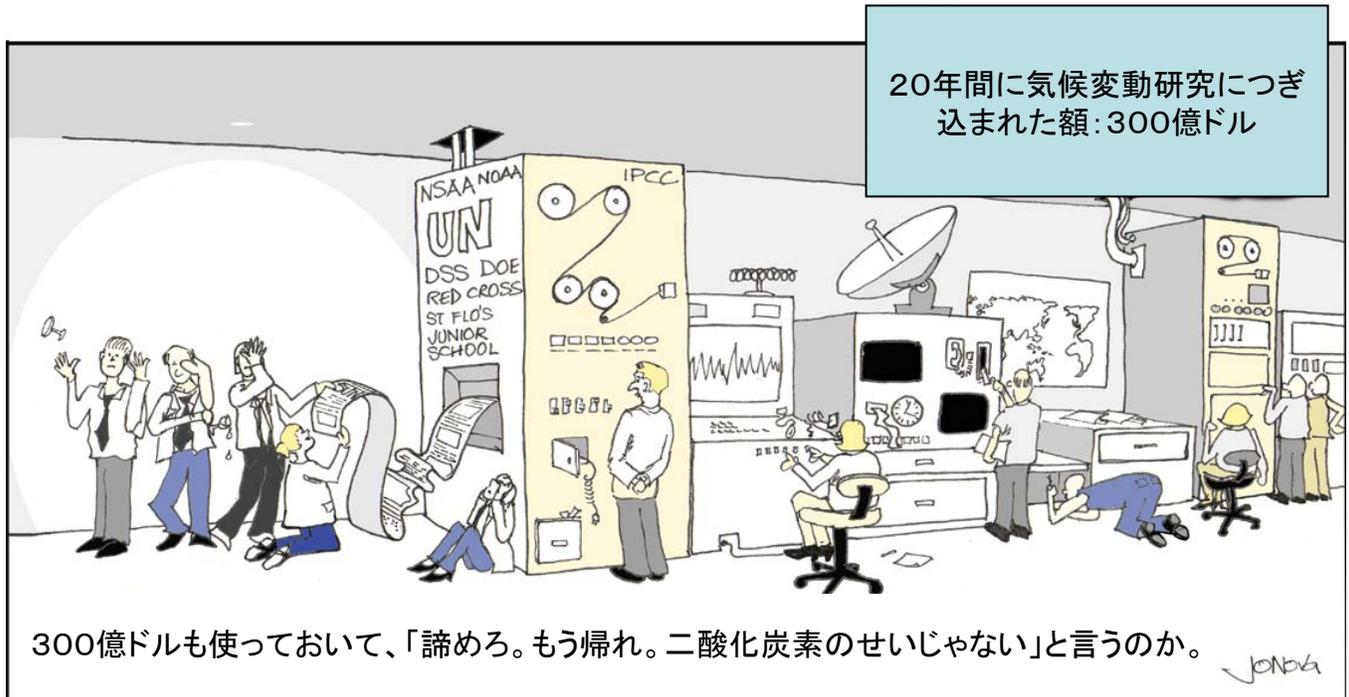
それは違う。前世紀、気温の上昇は0.7°C上がった。(過去1年間その上昇傾向はない。)しかし、1,700年頃、36年間で2.2°Cの上昇があった。この記録は、当時の唯一信頼のおける中央英国平均度から取ったものだ。)我々が現在言っている、前世紀の変化に対して、3倍の上昇と、3倍の早さで起こったことだ。自然の変化は、人間が引き起こしたものよりも、ずっと規模が大きい。

「この気候は異常だ」

過去150万年の間、氷河期があり、10°C気温は低かった。そっちの方が異常だ。

結論として:

過去に炭素が気温を上昇させた事は無い。どうやら今もその状況は変わらないようだ。
何の見当もついていないし、コンピューターモデルも、気候を予測する事は出来ていない。



排出量取引は、問題でないものを解決しようとする無駄な策だ。原因ではないものを、なんとか悪者になっているだけだ。

追加情報、出典情報、スケプティックハンドブックの入手方法は:
Joannenova.com.au

(1990-2007年: 温室効果ガスが原因だと信じていた)
ジョアンヌ・ノバ